

## ベクトル空間

Jacques Garrigue, 2016 年 10 月 7 日

**実数体** 前期に行列やベクトルに使われる数(スカラー)について詳しく言及しなかったが、必要な計算を可能にするために、体という構造を持つていなければならない。

$\langle \mathbf{K}, 0, +, -, 1, \cdot, {}^{-1} \rangle$  が体であるとは、以下の条件をみたしていることをいう。

- $0, 1$  は  $\mathbf{K}$  の元であり、任意の  $\mathbf{K}$  の元  $a, b$  について  $a + b, -a, a \cdot b$  も  $\mathbf{K}$  の元である。また  $a \neq 0$  ならば、 $a^{-1}$  も  $\mathbf{K}$  の元である。
- $\langle \mathbf{K}, 0, +, - \rangle$  は可換群である:  
 $a + b = b + a, \quad a + (b + c) = (a + b) + c, \quad a + 0 = a, \quad a + (-a) = 0$
- 同様に、 $a \cdot b = b \cdot a, \quad a \cdot (b \cdot c) = (a \cdot b) \cdot c, \quad a \cdot 1 = a, \quad a \cdot a^{-1} = 1$   
(ただし最後は  $a \neq 0$  のとき)
- 分配律がなりたつ:  $(a + b) \cdot c = a \cdot c + b \cdot c$

体の例として、有理数  $\mathbf{Q}$ , 実数  $\mathbf{R}$ , 複素数  $\mathbf{C}$  があげられる。ここではスカラーが実数であるとしているが、他の体を使ってもいい。

逆に、整数の集合  $\mathbf{Z}$  は乗算の逆元  $a^{-1}$  をもたないので、体ではない。スカラーが体でないと一般的に逆行列が計算できなかつたり、不都合が生じる。

**ベクトル空間** 集合  $V$  と体  $\mathbf{K}$  に対して  $+$  とスカラー倍が任意の元に対して定義され、

$$\begin{aligned} \vec{u} + \vec{v} & \quad (\vec{u}, \vec{v} \in V) \\ k\vec{u} & \quad (k \in \mathbf{K}, \vec{u} \in V) \end{aligned}$$

かつ以下の性質がみたされたとき、 $V$  が  $\mathbf{K}$  上のベクトル空間だという。

$$\begin{aligned} \vec{u} + \vec{v} = \vec{v} + \vec{u} & & \vec{u} + (\vec{v} + \vec{w}) = (\vec{u} + \vec{v}) + \vec{w} & & \vec{u} + \vec{0} = \vec{u} & & 0\vec{u} = \vec{0} \\ k(\vec{u} + \vec{v}) = k\vec{u} + k\vec{v} & & (k + l)\vec{u} = k\vec{u} + l\vec{u} & & (kl)\vec{u} = k(l\vec{u}) & & 1\vec{u} = \vec{u} \end{aligned}$$

**ベクトル空間の例** 以下の集合が  $\mathbf{R}$  上でベクトル空間である。

- (1)  $\mathbf{R}^n$  は成分を  $\mathbf{R}$  にとる長さ  $n$  の列ベクトルから作られた集合  $\mathbf{R}^n$ .

$$\mathbf{R}^n = \left\{ \begin{bmatrix} a_1 \\ \vdots \\ a_n \end{bmatrix} \mid a_i \in \mathbf{R} (1 \leq i \leq n) \right\}$$

- (2) 同様に、長さ  $n$  の行ベクトルを集めた  $\mathbf{R}_n$ .
- (3) 実数を係数とする 1 変数の多項式  $\mathbf{R}[x]$ .
- (4) 区間  $(a, b)$  で連続な実数値関数の集合  $C(a, b)$ .

部分空間  $V$  の部分集合  $W$  が  $V$  の和とスカラー倍によってベクトル空間となるとき,  $W$  が  $V$  の部分空間という.

定理 1  $W$  が  $V$  であるために以下の条件が必要十分である.

- (1)  $\vec{o} \in W$
- (2)  $\vec{u}, \vec{v} \in W$  ならば,  $\vec{u} + \vec{v} \in W$
- (3)  $\vec{u} \in W, r \in \mathbf{R}$  ならば,  $r\vec{u} \in W$

例 次数が  $n$  以下の 1 変数の多項式の集合  $\mathbf{R}[x]_n$  は  $\mathbf{R}[x]$  の部分空間である.

例題  $A$  が  $m \times n$  行列のとき, 次の  $W$  は  $\mathbf{R}^n$  の部分空間であることを示せ.

$$W = \{\vec{x} \in \mathbf{R}^n \mid A\vec{x} = \vec{o}\}$$

解の空間 同次形の  $n$  変数の連立 1 次方程式の解の集合が  $\mathbf{R}^n$  の部分空間である.  $A\vec{x} = \vec{o}$  の解の集合を解の空間と呼ぶ.

例題 次の  $W$  が  $\mathbf{R}^3$  の部分空間となるかどうか調べよ.

- (1)  $W = \left\{ \vec{x} \in \mathbf{R}^3 \mid \begin{array}{l} 2x_1 + 3x_2 - x^3 = 0 \\ x_1 - 2x_2 + 3x_3 = 0 \end{array} \right\}$
- (2)  $W = \left\{ \vec{x} \in \mathbf{R}^3 \mid \begin{array}{l} 2x_1 + 3x_2 - x^3 = 1 \\ x_1 - 2x_2 + 3x_3 = 2 \end{array} \right\}$

例題 次の  $W$  が  $\mathbf{R}[X]_3$  の部分空間となるかどうか調べよ.

- (1)  $W = \{f(x) \in \mathbf{R}[x]_3 \mid f(1) = 0, f(-1) = 0\}$
- (2)  $W = \{f(x) \in \mathbf{R}[x]_3 \mid f(1) = 1\}$
- (3)  $W = \{f(x) \in \mathbf{R}[x]_3 \mid xf'(x) = 2f(x)\}$